**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第５４回　（２０１９年０８月１３日）**

**・第５４回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」２９頁～３１頁**

**第５３回の復習**

参加者：前回は、「どのような人がグルであるか」の説明がありました。

マハーラージ：スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）の『バクティ・ヨーガ』の中に、「グルは何か、グルの基準は何か、弟子の基準は何か」が書いてあります。（編者注：「グルの必要」「弟子と師の資格」の章）

**やる気を起こすために神は化身として何度も現れる**

参加者：それに関連して、バガヴァッド・ギーター第4章の７節と８節、「ダルマが実践されなくなったとき、いつでもどこでも私は姿をとって現れる」の引用がありました。

マハーラージ：これはヒンドゥ教の特別な考えです。キリスト教では、イエス・キリスト以外には現れない。イスラーム教では、イエスも預言者として尊敬していますが、最後の預言者はムハンマドです。そのあとは出現しません。

ヒンドゥ教の聖典では、神様は必要ならば何回も化身としてあらわれる、と言っています。我々は、神の化身から霊性の励ましを聞きその時はやる気が出ますが、それは徐々に減っていきます。もう一度やる気を出すには、もう一度励ましを聞かなければなりません。

ただ1回だけ聞けばよい、という例外もあります。『福音』の中にオイスター（真珠貝）と真珠の有名な話があります。真珠貝は、スワティ星が出て、雨が降り、そのひとしずくを受けて、海のずっと下にもぐってじっと待ちます。するとやがて真珠ができます。真珠貝は、ただ一度、雨のひとしずくを受けるだけで真珠をつくることができるのです。しかしこれは特別な例です。　　　　☞（『福音』1126頁下段L８～12）

ふつうはマクロレベルでもミクロレベルでも何回も必要です。

我々個人のレベル（ミクロレベル）では、何回も励まされないとやる気は減ってゆきますが、それは社会のレベル（マクロレベル）でも同じです。

今では、多くの人がシュリー・ラーマクリシュナを好きです。イエスの信者もシュリー・ラーマクリシュナが好きです。なぜならイエスはまた生まれることはないからです。だから**シュリー・ラーマクリシュナのインスピレーションが欲しい**のです。そのうえ、その**教えは現代的**です。

**第５４回の勉強**

**第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問**

この章のヴィディヤー・シャーゴルについての説明の部分はベンガル語版と少し順番が違います。

📖読み

『福音』２９頁上段L６～下段L４

*彼は偉大な学者、教育者、文筆家および博愛家として知られていた。近代ベンガル語をつくった一人である彼は、サンスクリットの文法と詩にも精通していた。彼は寛大で、同国人のあいだで彼の名前を知らぬ者はなかった。その収入の大部分は未亡人や孤児や貧しい学生などの困っている人に施されたのである。その慈悲心は人間のみにかぎられなかった。彼は子牛からミルクを奪わないために何年間もそれを飲むのをやめていた。またウマを苦しめるのを恐れて馬車に乗らなかった。*

*彼は不屈の精神の持ち主で、カルカッタのサンスクリット大学の校長という収入の多い地位を、当局者と意見が合わないという理由で棄てた。彼の母への愛はとくに深かった。ある日、渡し舟が出なかったので、弟の結婚式に出てもらいたいという母の願いに応じるために、生命の危険を冒して激流を泳ぎ渡った。*

（解説）

ヴィディヤー・シャーゴルという名前は、タイトル（称号）のようなものです。本当の名前はイーシュワラ・チャンドラ・バンドゥパダィェ Ishwar Chandra Bandyopadhyayと言います。

**（１）ヴィディヤー・シャーゴルの特徴**

**特徴①ヴィディヤー・シャーゴル（学問の海）**

ヴィディヤー・シャーゴルは、とても有名な学者だったので、当時の人々からヴィディヤー・シャーゴル（学問の海）という称号をもらいました。

**特徴②ダヤー・シャーゴル（慈悲の海）**

また、ダヤー・シャーゴル（慈悲の海）という称号ももらいました。有名な学者の中には、利己的で、名声欲や金銭欲のために学問をする人もいますが、その人はダヤー・シャーゴルとは呼ばれません。

もし、彼がヴィディヤー・シャーゴル（学問の海）だけだったら、タクールは彼に興味を持たなかった。しかしタクールは自分が挨拶をするために、ヴィディヤー・シャーゴルのもとに行きました。なぜなら、彼がダヤー・シャーゴル（慈悲の海）だったからです。

タクールは、神様が大好きな人、神様を悟っている人、またはレベルがとても高い人のところに挨拶に行きました。例えば、ケシャブ・チャンドラ・セン、ラビンドラナート・タゴール、ダヤーナンダ・サラスヴァティのところに行きました。

しかし、ヴィディヤー・シャーゴルはその種類の人ではなかったので、霊的な実践はあまりしていなかった。一般的なヒンドゥ教徒として、その伝統には従っていましたが、神様をとても好きになって霊的な実践をする、ということはありませんでした。

「慈悲の海」の意味は、慈悲がいっぱいということです。「大きなもの」「一番（最も）」「いっぱい」をイメージするために、ヒンドゥ教のバジャンの歌詞では「海」という言葉がよく使われます。

（カンダナ　バヴァ　バンダナを歌われる。）

*バーシャラ　バヴァ****サーガラ****チラ　ウーンマダ　プレーマ****パータール***（５行目）

サーガラsāgaraは海。

プレーマ　パータールのパータールpāthārも海。

タクールにはプレマ（愛）がいっぱいあるということを、プレマ・パータール（愛の海）と言っています。

*バークタルジャナ　ユガラ　チャラナ　ターラナ****バヴァ****パール*（６行目）

バヴァbhavaは世界です。**バヴァ**　パールはこの世界の海（編者注：世俗の海、輪廻の海）です。

タクールの弟子が作った、タクールを賛える歌にもサーガラとあります。バヴァ　ターラナ　サーガラ　ターラナへ　（☞CD『Sri Ramakrishna Aratrikam』トラック４）

ヴィディヤー・シャーゴルの慈悲は、海のような慈悲でした。彼は、自分の給料の多くを他の人のために使いました。

「食事のためのお金がない」

「未亡人になったのでお金がない」

「私は学生ですが、勉強のためのお金がない。本が買いたいがお金がない」

など、さまざまな困った人がいますが、ヴィディヤー・シャーゴルは困った人が一度来たら、絶対にお金をあげた。絶対です。

ヴィディヤー・シャーゴルが慈悲によってどのように人を助けたか、それに関する話はいっぱいあります。

**・慈悲の海の例**

**（未亡人でも再婚できるように法律改正に尽力）**

一つは未亡人に対する慈悲。インドでは昔、子供のときに結婚するケースがありました。日本にもありましたね。インドでは、同じカーストの人と結婚しなければならなかったので、同じカーストの人が少ない場合は１０歳や１５歳は年上の人と結婚することもよくありました。そうしないとカーストがなくなるからです。しかし、結婚するだけ。奥さんの面倒も見ないし、奥さんのところにもいかない。そして年が離れているので、旦那さんがすぐに亡くなると、未亡人には社会の厳しい決まりがありました。魚を食べてはいけない。髪を短くしないといけない。白い服を着なければならない。満月、新月、エカーダシーには断食をしないといけない。など。

旦那さんの顔も覚えていないほどの小さい奥さんが、死ぬまでそれをしないといけない。

再婚はできないのです。

ヴィディヤー・シャーゴルは、未亡人でも再婚できるという法律を制定するために聖典をよく調べて、「再婚しても問題ありません。聖典はその許可を与えています」として、当時の政府はイギリスでしたが、政府に申し出て、最終的に政府は認可しました。ですが昔の保守的な人はヴィディヤー・シャーゴルのことをとても批判していました。

『福音』の中にも未亡人になった子供の話がありますね。

小さな未亡人が、友達のところには旦那さんが来るのに、どうして私のところには来ないのか、お父さんに尋ねます。お父さんは「ゴーヴィンダがあなたの旦那さんです」と答えました。それを聞いて、女の子はドアを閉めて泣きながら「ゴーヴィンダ、あなたは私の旦那さんですから、あらわれてください、あらわれてください、」と言いまいした。そして最終的に神さまがあらわれて「来ましたよ」と言いました。☞（『福音』305頁下段L12~L20）

**特徴③ヴィディヤー・シャーゴルは自由を好んだ**

ヴィディヤー・シャーゴルは自由が好きでした。ヴィディヤー・シャーゴルはイギリス政府のサンスクリット大学の学長でしたが、政府の役人のオーダー（命令）と異なる意見だったので、高い給料を得ていましたが、その仕事をやめました。なぜなら「私には自由が一番大事です（編者注：束縛を嫌った）」から。

また、ヴィディヤー・シャーゴルはとても伝統的な方でした。他の人はイギリス人の事務所では西洋風の服装でしたが、ヴィディヤー・シャーゴルは伝統的なものを身に着け、ショールをかけていました。そしていつも歩いていました。（馬車は馬に苦労をかけるから乗らない）

いつもそのような生活でした。

**特徴④母を尊敬**

彼はお母さんをとても尊敬していました。その尊敬はとても素晴らしいものでした。

**特徴⑤学校を創設**

ヴィディヤー・シャーゴルの生まれた場所とタクールの生まれた場所はそんなに遠くなかったので、タクールは子供のころから彼のことを聞き、興味を持っていました。タクールがコルカタに来た時、ヴィディヤー・シャーゴルもコルカタに住んでおり、そこで学校を作りました。『福音』を書いたMさんはその学校の先生でしたので、タクールはMさんにヴィディヤー・シャーゴルに挨拶したいと言いました。ヴィディヤー・シャーゴルはもしかしたら、新聞の記事などで、シュリー・ラーマクリシュナのことを知っていたかもしれません。

ヴィディヤー・シャーゴルはMさんに「どういう種類のパラマハンサですか？　黄衣を着ているのですか？」と聞いたので、Mさんは、「全然違います。ふつうの人の生活をしておられます（外見は、聖者らしいところはありません）。しかし彼の中は、神のこと以外なにもなく、神のこと以外何も知りません。神のこと以外何も考えていません」と答えました。

ヴィディヤー・シャーゴルはシュリー・ラーマクリシュナを自分の家にお連れするようにMさんに言いました。

**（２）シュリー・ラーマクリシュナが挨拶に出向く理由**

**挨拶する相手**：**霊的に高いレベルの信者、悟った人**

ラビンドラナート・タゴール、ケシャブ・チャンドラ・セン、という種類の人に挨拶がしたい。

**挨拶に行く理由①：「神様の特別なあらわれ」である、その人たちに会いたい**

**・アルジュナは神様の特別なあらわれのことを聞いて（１０章）、クリシュナの宇宙的な姿を見たいと思った（１１章）**

バガヴァッド・ギーターの第１０章のヴィブーティ・ヨーガ（超越者認識の道）の章を見てください。ヨーガ・スートラでは、ヴィブーティ（超能力）についていろいろありますが、

ヴィブーティ・ヨーガは、「特別な神のあらわれ」です。すべての中の特別なあらわれ、例えば、人びとの中では王様、山々のなかではヒマラヤ、パーンドゥ家のなかでは、アルジュナです。

しかし第１０章の最終節４２節に、

*だが、私のこうしたさまざまな顕現を知ったところで、アルジュナよ！　君にはいったい何の益があろうか。私は、自分の体のほんの一部分で、この全宇宙を支えているのだよ。*

とあるように、神様以外には何もありません。

一つは偏在。もう一つは、なんでも本当は「神様の特別なあらわれ」です。なぜなら神様は遍在なので、すべてのものが「神様の特別なあらわれ」だからです。たいそうな美人も、たいそうな力持ちも「神様の特別なあらわれ」です。学者も、お金持ちも「神様の特別なあらわれ」です。一般的に人は、自分の力で学者になった、お金持ちになった、と思いますが、本当はそうではありません。本当はみんな「神様の特別なあらわれ」なのです。

例えば、ヴィディヤー・シャーゴルは、特別な学者で、「慈悲の海」でした。とても特別な性質がありますと、それが「神様の特別なあらわれ」です。

神様の特別なあらわれとはどのようなものかを聞いたアルジュナ（第１０章）は、どういうものかを認識したと願い、クリシュナは宇宙的なその形を見せました。（第１１章ヴィシュヴァルーパ　ダルシャナ　ヨーガ）

**・シュリー・ラーマクリシュナはアルジュナと同じく「特別なあらわれ」を見たくて実践をした＝神が動機である＝見方、目的、動機すべての中心が神**

シュリー・ラーマクリシュナは宗教を調和したいから、その目的で宗教の実践した、というのが我々の大方の見方ですが、そうではありません。

イスラーム教徒はどのように神様のことを考えているか、キリスト教徒はどのように、シヴァの宗派はどのように、ヴェーダーンタはどのように、ヴィシュヌの宗派はどのように、ということを知る目的で、シュリー・ラーマクリシュナは宗教の実践をしました。自分は神様のことを好きなので、皆さんが神様のことをどのように考えて実践しているかを知りたかったのです。

そして最終的な結論が、皆が同じ神様のことを考えている、ということです。道は違いますけれども。実践した結果が、宗教の調和なのです。シュリー・ラーマクリシュナの見方、興味は神なので、他のことに興味はありません。有名な人を見たいのではなく、神様の特別なあらわれを見たいだけなのです。

我々にはいろいろな興味や目的がありますが、シュリー・ラーマクリシュナの見方、目的は一つだけです。すべてのやり方、考え方の目的は神。すべての中心は神です。だから、神様の特別なあらわれを見たくて出かけるのです。

ダヤー・シャーゴル、ヴィディヤー・シャーゴルも神様のあらわれの一つです。学問に優れていることも神様の恩寵です。有名が学者であること、ダヤー（慈悲）も神様の特別なあらわれです。それが挨拶に行く一つの目的です。

**挨拶に行く理由②：その人に悟りの障害があれば取り除きたいから**

また、その人に悟りの障害があるならそれを取り除いてあげたいという理由もありました。シュリー・ラーマクリシュナは、たとえば自分がどこまで進んでいるかわからない人に、悟るために何が必要かを助言しました。アヴァターだったのでそれができたのです。愛するケシャブ・チャンドラ・センに対してもそうでした。当時、ケシャブ・チャンドラ・センはブラーフモー・サマージに属し、神様の形は信じていませんでした。そのような見方をするケシャブにシュリー・ラーマクリシュナは、「神様には限度がない。だから神様に形はないとは言わないほうがいい（Don’t limit God.）」と助言しました。）「神様には限度がないのだからなんでもできる。形をとることもできます。形のある神、ない神、どちらの神様も正しいです。神様を限定しないでください。もしあなたが形のない神様が好きなら、形のない神様を信仰すればいいけれど、それだけが正しいとは言わないでください」と何回も言いました。これはシュリー・ラーマクリシュナの大きな教えの一つです。

ケシャブ・チャンドラ・センにはヒンドゥ教についての混乱があったので、シュリー・ラーマクリシュナにさまざまな質問をしました。

Q：ケシャブ・チャンドラ・セン「マザー・カーリーがこんなにも大きな宇宙を作ったのなら、どうしてマザー・カーリーの像は小さいのでしょうか？」

Ａ：シュリー・ラーマクリシュナ「太陽は遠くから見たらお皿のように小さく見えます。太陽が本当はとても大きいことは、太陽の近くに行くと分かりますね。マザー・カーリーの本性が分からない（つまりマザー・カーリーから遠くにいる）と、そのように小さく見えます。もしマザー・カーリーを瞑想して、本性を理解すると、マザー・カーリーがどれくらい大きいか、大きいだけでなく無限であることが分かります」

Q：ケシャブ・チャンドラ・セン「どうしてマザー・カーリーは色が黒い、時々青いのですか？」

Ａ：シュリー・ラーマクリシュナ「海の水は遠くから見たら、青や黒に見えますが、海の近くに行って海の水を手に取ると、全然色がありません。無限に例えられる海と同じで、マザー・カーリーは無限なので遠くから見ると、黒や青に見えます」

Q：ケシャブ・チャンドラ・セン「どうして私は悟りができないのでしょうか？」

Ａ：シュリー・ラーマクリシュナ「あなたには、名声欲などの欲望がある。欲望がある間は、悟ることはできません」

ヴィディヤー・シャーゴルに対しても後押しするために言いました。

シュリー・ラーマクリシュナ：「あなたは心の中に金（神様のこと）があるのに、気づいていない。あなたの人生の目的を考えてください。人のお世話をすることは人生の目的ではありません。本当の目的は自分の本性を悟ることです」

ヴィディヤー・シャーゴルはそのことを聞いてもあまり霊的実践のやる気が出ませんでした。

📖読み

『福音』３０頁下段L３～L１５

*ヴィディヤー・シャーゴルは立ち上がって師を迎えた。シュリー・ラーマクリシュナは片手をテーブルに置き、長椅子の前にお立ちになった。彼は、前からの知り合いででもあるかのように、ヴィディヤー・シャーゴルを見つめ、うっとりした気分で微笑なさった。そのままの状態で数分間、じっと立っておられた。ときどき、心を通常の意識に戻そうとして、「水を一杯飲もう」とおっしゃった。*

そのあいだに、家族の若い人びとと、ヴィディヤー・シャーゴルの友人や親類数名がまわりに集まってきていた。シュリー・ラーマクリシュナはまだうっとりとした状態で、長椅子にお座りになった。ヴィディヤー・シャーゴルに学費の援助を乞いに来た一七、八歳の若者が、そこにすわっていた。師は若者からは少し離れてすわり、放心状態でおっしゃった、「よ、この少年は世間に強く執着しています。彼はあなたの無知の世界に属しています」

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナの人の見方は、神様を好きor 神様を好きでない、放棄しているor放棄していない、が基準です。その見方で、その青年はとても世俗的だ、と言いました。ベンガル語の『福音』にはまだ続きがあります。

*ブラフマンの知識を得るのにあまり関心がなく、ただ経済的に役立つ知識を得ることにとしているのはバカげたことだ、ということをタクルはおっしゃったのであろうか。*

☞（『不滅の言葉』翻訳：田中嫺玉、発行所：ブイツーソリューション154頁L13、14）

この部分も英語版、英語版から翻訳した日本語版にあればよかったです。

📖読み

『福音』３０頁下段L１６～３１頁上段L３

*ヴィディヤー・シャーゴルは誰かに水を持ってくるように言いつけ、Mに、師は甘いものも召し上がるだろうか、とたずねた。Mが反対しなかったので、ヴィディヤー・シャーゴルは一生懸命に自分で奥の間に行き、菓子を持って来た。それは師の前に置かれた。バーヴァナートとハズラも相伴をした。菓子がMにすすめられたとき、ヴィディヤー・シャーゴルは言った、「おお、彼は家族の一員のようなものです。彼のことを心配する必要はありません」*

*ある若い信者のことを、師はヴィディヤー・シャーゴルに、「彼はよい若者で、心が健全です。パルグ河のようなものだ。表面は砂におおわれているが、少し掘ると下の方で水が流れている」とおっしゃった。*

（解説）

ブッダガヤに皆さんと巡礼に行ったときに、先にガヤに行きましたね。その時に行った川がパルグ河です。上には砂がありますが、砂をちょっとどけると下は水です。外から見ると普通に見えるけれども、中は神様が大好き、ということを、パルグ河の例を使って言っています。その一番いい例はシュリー・ラーマクリシュナ本人です。外から見ると、お坊さんのしるしはなく、服を着て靴下をはいてショールを羽織っています。それどころか、時々すべてを脱ぎ棄てて衣服をまったく身につけていないこともありました。なんと極端なことでしょう！

ケシャブ・チャンドラ・センがドッキネッショルに来る日のこと、シュリー・ラーマクリシュナは、ベンガル人が普段身に着けるドーティを着て赤いボレロを着ていました。そして、食後にベテルの葉を噛んで口元がとても赤くなっていました。それを見たケシャブ・チャンドラ・センが「どうしてあなたは、今日はこんなにも素晴らしいのですか？」と聞きました。

シュリー・ラーマクリシュナは、「あなたの気をひくためにきれいにしました」と言いました。もちろんタクールは、世俗的な意味でそう言ったのではなく、神様の信者であるケシャブ・チャンドラ・センを恋人のように思ってそのような表現をしたのですが、そんな装いをする方が、次の瞬間には、何も服をつけていないのです！　（笑い）

シュリー・ラーマクリシュナは、二人の若い青年について、言及しました。一人は、本当は世俗的でお金が欲しい。もう一人のシュリー・ラーマクリシュナの弟子の目的は、神様を悟ることです。二人の青年を外から見ただけでは分かりませんが、シュリー・ラーマクリシュナの目はレントゲンのように、中に何があるかすぐわかりました。

📖読み

『福音』３１頁上段L３～L４

*若干の菓子を召し上がったあとで、師は微笑みながらヴィディヤー・シャーゴルに向かい話を始められた。*

*（解説）*

**（３）ヴィディヤー・シャーゴルとの面白い会話**

今からとても面白い話が始まります。ヴィディヤー・シャーゴルはとても有名な学者でたくさん勉強してきたので、言葉をたくさん知っています。それに比べてシュリー・ラーマクリシュナは何も勉強していない。一般的な人は、そのような高いレベル学者の前にいくと、怖くて話が続かない。しかし、シュリー・ラーマクリシュナは同じレベルのように話しています。それどころか、ヴィディヤー・シャーゴルが答えられないこともあった。シュリー・ラーマクリシュナが言うことに対して面白い答えが思いつかないので、相槌を打つだけのこともありました。

**・マザー・カーリーがふさわしい答え（appropriate answer）を供給する**

どうしてシュリー・ラーマクリシュナは有名な学者と同等、もしくはそれよりちょっと上手に話ができたのですか？

参加者「神様が舌を動かしている、というか、しゃべらせている」

本当にそうです。

マザー・カーリーがふさわしい答え（appropriate answer）を供給しているからです。

だから面白く意味が深いですね。タクールの答えはヴィディヤー・シャーゴルの印象にも残りました。

📖読み

『福音』３１頁上段L６～L１２

ある人びとは立ち、ある人びとはすわっていた。

　師「ああ、きょう、ついに私は海に来た。いままでは、運河か、沼地か、せいぜい川ぐらいにしか会わなかった。しかしきょうはシャーゴル（海）と顔を合わせている」（みな笑う）

ヴィディヤー・シャーゴル（微笑して）「ではどうぞ塩水をお持ち帰りください」（大笑い）

（解説）

**・ふさわしい答えの例：「ついに私は海（シャーゴル）に来た」**

ウイットに富んだ言い方ですね。シュリー・ラーマクリシュナは言葉を使って、深い意味も示しました。

海を見たことがなかった人でも、大きな川や琵琶湖やミシガン湖のように大きな湖を見たことはあるかもしれない。しかしそれは大きくても海ではないです。ここでは人のことを川や湖に例えて言っています。ある人はとても有名な学者でも、ヴィディヤー・シャーゴルとは同じではない。

今までいろいろ見たけれど、海を見たことはなかったと言うことに対するヴィディヤー・シャーゴルの答えも面白いです。

「ではどうぞ塩水をお持ち帰りください」です。

その答えは正しいでしょ。海は大きいですが、塩辛い。塩辛いけれど、あなたはここまで来たので、それを取ってください。

📖読み

『福音』３１頁上段L１３～L１７

*師「おお、どうして塩水などというのですか？　あなたは無知の海ではない。ヴィディヤーの海だ。あなたは練乳の海です」（みな笑う）*

*ヴィディヤー・シャーゴル「まあ、そのようにおっしゃるがよろしい」*

*パンディットは黙ってしまった。*

**・ふさわしい答えの例：「練乳の海」**

本当は、ヴィディヤー・シャーゴルは「練乳の海」です。すごい答えでしょ。すぐにパッとタクールはふさわしいヴィディヤー・シャーゴルのイメージを返しました。

その答えが正しかったので、会話では冗談には冗談で返す、ということがありますが、ヴィディヤー・シャーゴルは黙ってしまった。

練乳は英語ではコンデンス・ミルクとなっています。ベンガル語ではクシールkshiarと言います。クシールはミルクを長時間温めて残ったものに砂糖を入れたものです。

タクールがクシール・シュムッドラ（クシールの海）の例をつかったのは、良い性質がいっぱいある、ということです。

クシール・シュムッドラのイメージはヒンドゥ教の聖典の中にあります。海は塩辛いですが、クシールの海は甘い（良い性質）。ヴィディヤー・シャーゴルには、慈悲など良い性質がいろいろありますから。

📖読み

『福音』３１頁上段L１７～L１９

*シュリー・ラーマクリシュナはおっしゃった、「あなたの活動はサットワの息吹を吹き込まれている。それらはラジャス的ではあるが、サットワの影響を受けている。*

（解説）

**（４）ヴィディヤー・シャーゴルはサットワのラジャス**

面白いですね。サットワ、ラジャス、タマスがありますが、サットワのラジャス、サットワのタマスもある。

**これはタクールの特別な説明**です。バガヴァッド・ギーターの中にはありません。タクールの話には、ときどき聖典よりもっと高いアイデアが入っています。**ヴェーダ、ヴェーダーンタも超越しています**。サットワのラジャスの例は、ヴィディヤー・シャーゴルです。サットワのタマスの例は、マザー・カーリーがあらわれてくださらないと言って、自分に刃物を向けたタクールが例です。☞(『福音』序論４６L６～８)

📖読み

『福音』３１頁上段L２０～L２２

*慈悲心はサットワから生まれる。他者の福祉のための仕事はラジャスに属するのだが、しかしこのラジャスはその根底にサットワを持っていて、害はない。*

（解説）

仕事のために動くことがラジャスの性質の特徴です。しかし、ヴィディヤー・シャーゴルの働きの目的は、ダヤー（慈悲）ですから、サットワです。彼には名声欲も見返りを期待することもありません。もし名声欲のためなら、たとえ人のために働いても、それは１００％ラジャスで、サットワのラジャスではありません。たとえ最初は、慈悲からの働きでも、最終的に名声欲が出たり、見返りを求めるとラジャスになるのです。

**（５）ヴィディヤー・シャーゴルの慈悲はサットワ的だが、助けた相手が自分を批判すると心を痛めた。**

ヴィディヤー・シャーゴルは全く見返りのことは考えずに働いていましたが、助けた相手がヴィディヤー・シャーゴルを批判すると、心が痛みました。もし、皆さんが困った人を助けたにもかかわらず、相手から感謝をされず、逆に批判をされたら心が痛みますね。ヴィディヤー・シャーゴルも同じように痛みを感じ、最終的にコルカタを離れて田舎に住みました。都会の、あまり心がきれいではなく複雑な人を避けたかったからです。都会の人をいっぱいお世話しましたが、その人たちの中にも、例えば未亡人の再婚に関して、コンサヴァティブ（保守的な）人は彼を批判しました。それを知ったヴィディヤー・シャーゴルはとてもびっくりしました。どうして前に手伝った人が私を批判するのだろうと。そして、「私が助けた人は必ず私を批判する」という考えが出ました。そして「私が助けた人は私を批判する。しかし、どうして助けたことのない人も私を批判するんだろうか？」とも思いました。とても失望の感情のコメントです。ヴィディヤー・シャーゴルはサットワのラジャスでしたが、シュリー・ラーマクリシュナの見方では、完璧ではありませんでした。

しかし、本当に悟った人は、批判されてもなにも気にしません。悟った人とヴィディヤー・シャーゴルはそこが違います。それは大きな違いです。

バガヴァッド・ギーターの第１２章１９節を読んでください。

*に平然としており、無駄な口をきかず、何事にも満足し、住所住居に執着せず、一途に私を信じる人、そういう人達を私は愛する*

トゥッリヤ・ニンダー・ストゥテイル＝ニンダーが批判、ストゥテイルが褒める、という意味です。ほめたりけなしたり、という意味です。

📖読み

『福音』３１頁上段L２２～下段L６

*シュカをはじめとする賢者たちは、人びとに宗教上の教えを与えるのに、つまり神について教えるのに、心に慈悲の念を抱いていた。あなたは食物と学識とを分かち与えておられる。**それもまたよろしい。もしこのような活動が無私の精神でなされるなら、それらは神に通じる。**しかし大部分の人は名声のため、または功績を立てるために働くのだ。彼らの活動は無私ではない。それにあなたはすでにシッダーであられる」*

*ヴィディヤー・シャーゴル「それはどういうことで？」*

（解説）

シュカ・デーヴァ、スワーミージー、お釈迦様、みんな最初は悟ってそのあとに教えましたが、ヴィディヤー・シャーゴルはまだ悟ってないので、そこが違います。お釈迦様もタクールも悟っていましたから、批判されても全然気にしませんでした。

シュカ・デーヴァも、シャンカラー・チャーリヤも、皆さんを教えるために、苦しみ、悲しみから楽しみの道へと導くために、手助けをしました。

**ふさわしい答えの例：「あなたはすでにシッダーであられる」**

シッダーには、二つの意味があります。

一つは野菜を煮る、シッダー・エーチェーとは、よく煮えたという意味です。

もう一つは、成功という意味です。「求道者がシッダー」の意味は、悟ったという意味です。

シッダールタのシッダーです。霊的な実践の目的が満足のいくものになったという意味です。ヴィディヤー・シャーゴルはタクールがどういう意味でシッダーという言葉を使ったか分からなかったので、「どういう意味で？」と尋ねました。

📖読み

『福音』３１頁下段L７～L１１

*師（笑いながら）「ジャガイモやその他の野菜はよく煮えると柔らかになるでしょう。あなたはじつに柔らかな性質を持っておいでだ。じつに慈悲深い！」（笑い）*

*ヴィディヤー・シャーゴル（笑いながら）「しかしカライ豆のねりものを煮ると、いっそう固くなります」*

（解説）

ヴィディヤー・シャーゴルは頭がいいので、「確かに野菜は煮ると柔らかくなるが、例外もある」ということを、カライ豆のねりものの例を出して答えました。

📖読み

『福音』３１頁下段L１２～L１５

*師「しかしあなたはあの種類には属しておられない。ただのパンディットたちは、固くなって決して熟すことのない病気の果物のようなものです。そのような果物は、未熟なものの持つ新鮮さもなければ熟したものの持つ風味もない。*

（解説）

マンゴーにも青くなく、熟してもないものがあります。そういうのは味が変です。

📖読み

『福音』３１頁下段L１５～L２１

*ハゲタカは、たいへん高く舞い上がるが、その目は常に地上の腐肉に注がれています。書物の学者は、賢いという評判はとっているが、『女と金』に執着している。ハゲタカのように、彼らは死肉を探しているのです。彼らは無知の世界に執着している。慈悲、神への愛、および放棄は真の知識の輝きです」*

*ヴィディヤー・シャーゴルは黙ってこれらの言葉にきき入っていた。*

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナがシッダーという言葉を使った本当の目的は、ヴィディヤー・シャーゴルにはうぬぼれがなく謙虚な心だったので煮えた野菜だ、と言いました。しかしヴィディヤー・シャーゴルが反論したので、詳しく説明をしました。

ヴィディヤー・シャーゴルは一回だけ反論しましたが、シュリー・ラーマクリシュナの説明に対して返答できませんでした。これは特別なことです。ヴィディヤー・シャーゴルは社会のみなさんから尊敬を受けるくらい有名な人でした。それに対して、シュリー・ラーマクリシュナは、貧乏な家庭の出の田舎者で、なにも勉強をしていないマザー・カーリーのプリースト（司祭）でした。

（第５４回『福音』勉強会）以上